

氏名(国籍)	韓 炳 玉 (韓 国)
学位の種類	博士(芸術学)
学位記番号	博甲第1,590号
学位授与年月日	平成8年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	芸術学研究科
学位論文題目	墨蹟の地域的展開とその特質 —韓国 ^{はん} の禪僧の書と中国・日本 ^{びよん おく} の禪僧の書との比較検討—
主査	筑波大学教授 角井 博
副査	筑波大学教授 藤井 久栄
副査	筑波大学教授 文学博士 相馬 隆
副査	東京家政学院大学教授 芸術学博士 眞保 亨

論 文 の 要 旨

本論文は、日本書道史上破格な書美を形成し、しかも特異な精神文化遺産の一つとして今や世界に喧伝される「墨蹟」、すなわち臨済宗僧侶の書の特質を究明したもので、とりわけ「墨蹟」という共通した概念のもとに中国・日本・韓国における歴史的展開を詳細に論述し、三地域の墨蹟の比較検討を試みたものである。

全体を六部に分け、序論において本研究の目的・意義などを説き、以下、第一章中国・日本・韓国と墨蹟研究、第二章中国の墨蹟、第三章日本の墨蹟、第四章韓国の墨蹟、と題して論述し、最後に三地域における墨蹟を比較分析して特質を探り、結論としている。

先ず序論を三節に分け、第一節研究の目的と意義、第二節研究方法、第三節研究対象としている。すなわち、著者はかねてより書における精神性を重視しているが、気韻生動・気迫の美を賞揚する日本における「墨蹟」分野に着目し、その概念をもって中国・韓国に禪僧の書を求め、三地域における墨蹟の性格・筆法を特徴づけ、書の芸術性を解釈しようとする目的を明確に述べている。特に著者は母国韓国の書芸史研究の現状に鑑み、この研究を進めることによって韓国の墨蹟の特質を明らかにすること、さらには韓国における墨蹟研究を成立させ、確立しようとする熱い意欲のほどを表明している。

第一章中国・日本・韓国と墨蹟研究では、第一節で「墨蹟」の概念とその成立を日本文化史の中で説明して墨蹟の意義と性格を明らかにし、第二節で日本における墨蹟の先行研究を紹介し、さらに中国・韓国における墨蹟研究の現状と墨蹟観について論及している。とりわけ韓国の項では、墨蹟保存の現状・掲載誌の紹介・今後の研究展望などを事細かに記述している。

第二章中国の墨蹟は、歴史的には最も古く存在した中国の墨蹟を取り上げ、四節から成る。先ず第一節で中国における禪宗史の概略を説明し、第二節では文献に記録された墨蹟と中国に現存する墨蹟との両面から墨蹟の展開・墨蹟僧の学習方法や書体・書風・性格などを考察し、中国における禪と書との関係を闡明にしている。続く第三節では広義の墨蹟僧である智永・懷素の書法史上の業績を特記したうえで、彼らが後世に及ぼした影響、さらには禪と書との融合の過程を論述している。そして第四節において、禪宗最盛期における宋代文人士大夫の書と書論に対する禪宗の影響について論及している。とりわけ宋代文人の巨匠である蘇軾・黄庭堅については、禪と詩書画の関係・文人と禪僧との交流・相互の影響関係などを力説している。

第三章は「累積」の概念の成立した日本の墨蹟を取り上げ、第一節において墨蹟隆盛の要因を日本禪宗史の上

から、また日本の社会構造・茶の湯を中心とする文化形態・民族性などの面から考察している。第二節は日本において珍重・愛玩された墨蹟の種類と内容を整理したもので、大きく宗教的墨蹟と芸文的墨蹟とに区分し、それぞれ詩体と文体とに分類整理している。第三節は日本的墨蹟の成立と最も日本的な墨蹟観を究明したものである。禅僧らは当初、王羲之・黄庭堅・趙孟頫らを書の規範としたが、中近世の墨蹟の大半は気迫を重んずる自我の表現であって、その実体を有する代表的なものとして筆者自ら推奨する一休宗純・沢庵宗彭・白隠慧鶴の墨蹟について考察を加えている。

第四章は韓国の墨蹟について初めて論述するものである。従って第一節韓国墨蹟の成立では、韓国墨蹟の全体像と特徴とを掴むことに留意し、韓国禅宗史・書芸史に言及しながら墨蹟の展開を述べている。第二節韓国の禅と墨蹟は、禅宗界における文字揮毫の必要性を論じ、文献に載る墨蹟僧の記録及び現存する墨蹟の所在・種類とを明記し、各墨蹟の特徴を闡明にしている。第三節金正喜の禅と書の融合は、韓国の文人士大夫の書に対する墨蹟の影響を追究するもので、李朝末期最大の文人である金正喜における禅と書との融合を論述している。金正喜の略伝・書画家としての業績・禅との関係・禅的表現による書風の変化を分析・考察しており、単なる文人ではない金正喜の一面を見事に表出している。

最後の結論は二節からなり、如上の論述を基に三地域の墨蹟を技法と精神性の両面から比較検討し、相違点と共通点を明らかにすることを目的に考察している。第一節墨蹟の地域的展開は、禅宗教団の師承関係・墨蹟における師承関係により三地域における墨蹟の発展・性格に相違をもたらしたと説くもので、特に中国・韓国における科挙制度による文人官僚の支配、日本における武人の支配という社会的背景が、各墨蹟の趣を異にし、各国の墨蹟観に大きな差異を生じたと力説している。続く第二節墨蹟の性格と筆法は、三地域の墨蹟を学書（手本の選択）・書体・書風という視点から比較考察し、以下のように結論づけている。中国の禅僧は多くの名家・種々の法帖を手本とし、墨蹟には篆・隸・草・行・楷の各書体が見られ、その書は概ね正統の書法である。韓国では王羲之・趙孟頫を習うことが多く、草・行・楷の書体とハングル文字が見られ、伝統的書法を尊ぶ傾向にある。日本ではさほど伝統的書法の習得に拘泥せず、書体的には草・行・楷と仮名が見られるが、その書は気迫の発露を重視している。その結果、中国の墨蹟には時代によりさまざまな表情が伺われ、韓国の墨蹟には適美（媚）・端妍、日本の墨蹟には不均斉・幽玄が付きまとうと特徴付けている。また、毛筆を以て文字を書く筆法そのものは個人・国により差異があるのは当然のことであるが、著者はここで墨蹟に共通するものとして起筆・終筆・転折・結体・章法の単純化・簡略化を掲げ、しかも氣勢と速筆によって深穩にして鈍化された気迫の書が生まれていると強調し、これからの書は墨蹟のような何物にも拘束されない自由な表現に新しい価値と創造性を見出すことが出来ようと締め括っている。

巻末に付録として、原典・禅宗関係著書・書道関係図書・歴史書・文学・辞典・論文からなる参考文献を掲げ、また別冊として添えた「図版資料」の目録を収録している。

審 査 の 要 旨

禅は単なる思想・哲学ではなく、体系的な学問でも道徳でもない。あくまでも坐禅修道によってのみ禅の真味を体得することができるという宗教（仏教）の一派である。つまり講義を聞き、文献を読んで、知的に知るものではなく、実際の行、坐禅をすることにより体験的に奥義を悟るものである。正に「教外別伝。不立文字。直指人心。見性成佛。」の世界なのであるが、日々の修行生活の規則を掲げたり、公案を示したり、弟子の名を付けたり、当時の文人に倣って悟りの境地を詩句に託したりするうち、禅宗僧侶の中に文字揮毫の場が次々に拡大されていった。こうした僧侶達の文字は書として立派な作もあるが、概して書法は第二義的なもの、むしろ書法に拘泥しない破格なものが多い。そこにあるものは書法の巧拙に関わらない、禅機躍動した禅僧独自の風格なのである。端的に言えば、禅僧の筆跡の大部分は素人の手になるものであり、初めから法や格を学ぶことなく、まっ

たく自由に筆を運ぶうちに自らの持ち味の滲みでた美しさを秘めたものなのである。

本論文は、著者がこうした性格の墨蹟を新たに「禅僧の悟境を示す書」と定義し、敢えて書法を求め、その美の何たるかを探り、中国・日本・韓国における墨蹟の展開を禅宗史・書道史・文化史の中で具体的に検討し、墨蹟の性格・筆法を闡明にした最初のものである。とりわけ、韓国の墨蹟を初めて比較論的に明確にしたところに本論文の意義と独創性がある。本論のうち第二～四章は三地域の墨蹟を詳述したものであるが、第二章は中国の田光烈氏の著作に論拠を得て、中国人的墨蹟観をよく説示しており、第三章は日本的墨蹟の特徴をよく把握した記述であり、第四章は足で集めた資料の蓄積が見られ、それぞれに成果を収めている。先行本に見られるような現存文物の羅列ではなく、三地域の実情によって論述の手法を変えており、方法論的にも独自性の高い論文と言うことができよう。

しかし、著者自らが述べているように、韓国内における調査は種々の障害が伴い不十分であるし、日本に現存するものも寺宝や個人の秘蔵品が多く、原件の調査という面では完全とは言えない。今後もさらなる文献・文物の資料収集に努め、原件の実見・精査を積み重ねることにより、独断にすぎる論述と批判されぬよう後考を要しよう。また、墨蹟以外の文学・絵画作品など悟りの表現についても研究を期待するものである。

本論文は、禅語・墨蹟内容の記述などに一部晦渋な部分も見うけられるが、難解なテーマの割には文章がよく通っており、外国人留学生としては水準以上のものと思われる。いずれにせよ本論文は、古く伝統ある文化財を新しい手法で鋭く精力的に解明した労作として高く評価できよう。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。